

一九七七年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポラ幢ケ谷九〇四 電話(03)3337714649

振替 東京0158431 労金 東京労金本店No1154163

FAX 03)329915367

購読料 月額600円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■ 巻頭言 ■

勝つために / 五つの課題

基本政策転換は政治に反動を持ち込む

—— 社会党の九五年宣言阻止闘争は無意味 ——

中央はだめでも地方は元気だった

—— 基本政策転換と私たちの課題 ——

自・社連立に異議あり

“修正案” 提出者に心から敬意

—— 北海道新聞にみる社会党大会 ——

◇ 投稿 ◇

必要な「護憲派」社会党員の体質改善

資料1 護憲の新たな政治勢力の結集をめざして

（「護憲ネット」事務局第一次案）

資料2 離党にあたっての声明

日本の階級闘争、護憲運動とベトナム、中国

—— 中国、ベトナムを旅して(一) 坂牛 哲郎 ——

読者からのおたより

旬刊 社会通信

NO.583

一九九四年一〇月一日発行

一九九四年一〇月一日発行
(毎月一日・二日・三日三回発行)

■ 巻頭言 ■

勝つために！ 五つの課題

解雇撤回・J R復帰の闘いは、十年をひとつの節目として敵側にとっても我々にとってもこれまで以上の大きな節目と闘いの最高潮を作らなければなりません。

一九八七年四月のJ R発足以降、九七年までが十年。

九七年三月には清算事業団の解散、敵の最大の弱点と言える赤字債務解消が完全に破綻の一途をたどっている。

そして、今後に於いても当初計画の枠を小さくさせる事はできず、逆に国民負担の増額という最悪の結果として開き直る事は目に見えている。

この事実を明白に暴露させるためにも、国労の闘いの設定・戦術を万全にする事が必要です。当然、国労への攻撃は止む事なく揺さぶられ、組織に対する分断攻撃が執拗に加えられる、ゴネ得論や労働界に於ける国労の孤立化を狙う動きがマスコミ・他労組・政府により作られる懸念はある。しかし、情勢や世論形成は自らで作り出せるというこの間の経験をもとに、予想される分断攻撃を跳ね返す団結力をより強化しなければならない。

その為に第一として、勝利への執念と貪欲さを持たなければならぬ。原則的な闘いの継続の中から、有効的な運動を作り出し、メリハリの効いた運動の展開を図り、量から質への転換をする。

やはり、敵の弱点・嫌がる事を効果的に行う。

第二に、混乱・迷った時は原則にかえるべきです。

闘争団結成時、組織自活体制への道程、団結・信頼関係作りなど弱さから強さへ変わって行った繰り返しに自信を持ち、意識の高揚を図る。

第三に、長期闘争体制を作り、生活と闘争の両立が求められている。

第四に、闘争団同士の交流を作り、学び合い、自分の団に取り入れる運動が必要です。

第五に、共闘運動の再構築をどう作るのかです。労働運動の再生へ向けた準備とともに、共闘体制の確立をめざす。実態討論の中から生きる事・闘い続ける事のすばらしさを見だし、共に情勢の一致を図り課題を明確にする。人権・環境・反合理化統一闘争など、あらゆる闘いに共闘し地域での労働運動（地区労運動）の継続・強化を図る。

以上述べた問題点・取組がすべてとは考えていません。少なくとも私達自身でできる事が何なのか、より何ができるのかを全体で確認しながら到達目標を明確にして闘いを推し進めたいと考えます。

勝つための闘いを各団員・家族が首切りの怨念と職場復帰を勝ち取る執念で、国鉄闘争をより発展させる決意に燃えています。共にガンバロー！

（留萌闘争団）

「基本政策転換」は政治に反動を持ち込む

——社会党の九五年宣言阻止闘争は無意味——

今後の不安に異論統出の党内

第三保守党へ転落を開始した社会党は今全国大会後、全国各地で総括討議や大会報告をかねた論議が展開されている。久保書記長を先頭とする右派は基本政策と人事で完全勝利したことで勢いづいており、新派閥・新民主連合（山花前党委員長が代表、国会議員約六十人）の拡大を地方組織にもおよぼそうとしている。しかしこの右派の内部もおよそ一枚岩というにはほど遠く、思惑はいろいろで展望は暗く、次の方向に流されよう。

①当面は村山内閣支持で、区割り法案、予算（九五年度）、消費税率上げ、国連安保常任委などに臨み、次は有利な選挙区を選んでの候補へ、そして大臣、次官、国会のポストの獲得をねらうであろう。

②右派のこの人達は政党再編のヤマは地方選後から参院選前後とみており、村山内閣の失政が出てくれば、新生、公明、民社などの新々党側へ走ることも当然考慮のなかに入れている。東京十区の渋沢利久（六六歳）前代議士はすでに大会直後離党して新生党へ走っており、各地でこれに続く者も考えられる（旧連立側に立つことで選挙が有利とみられる場合）。

③山岸連合会長の退陣は右派にとって不利とみられているが、実際は芦田、鷲尾、得本といった右翼幹部への代替りによってむしろ新々党に向うには有利と読むべきである。「連合」は今後一層求心力を失い、各単産の発言力が強まる事が予想される。労組の政党離れは急速に進み、「政党支持の自由」も進行することになる。

現在進行している社会党内の論議は、大会の総括にとどまらず、「党再建の可能性」、「新党の是非」、「小選挙区制下に行なわれる総選挙の行方」、「党の政策と組織を今後どうするか」、「自治体選挙と党公認の関係」、「労働組合の政治方針」など運動・活動上の全般にわたっており、「社会党五十年の総括」に事実上取組んでいる。総括・学習そして実践とならなければならぬわけで、当然今後の方針がだされなければならない。

現在進行している護憲派・右派のなかでの総括討論の傾向は次の四つに集約できよう。

第一は、永年にわたる右傾化、今後の基本政策の転換によって決定的に社会党は護憲の党、勤労国民の党から転落したと判断、そのため離党する（すでに離党したものも含めて）と共に、今後いっさい政治活動は止めるというもの。

第二は、党再生・再建の展望は無くなったと認識し、来るべき護憲闘争に備え、新党結成に向うべきだというもの。

第三は、県本、総支部の機関として「基本政策の転換を認めず」と決め今までの社会党の路線による党活動を継続するというもの。

第四は、一応は中央の（今大会の）決定に今後従い、次の大会にかかる「九五宣言（案）」（綱領改訂）を否決する（この成立には三分の二の多数が必要だから）というもの。

あえていうならもう一つのケースがある。これは右派の良心派（中間派ともいえる）の一部では、どっちみち社会党の解体、弱小化は避けがたく、もう政党の体はなくなるから早めに離党しようというもので、議員の場合無所属になる（来春の選挙も）という人達も

出ている。

どのケースも社会党という政党にとっては最悪の事態であり、分散又は流れ解散の方向である。このとき護憲派党员、いわゆる左派党员は何をなすべきか。いうまでもなく、憲法を守り、勤労国民のいのちと権利をより拡大するために運動から離脱してはならないのであって、「護憲ネット」の提唱する「新政治勢力の結集」に参加して護憲派の態勢を建て直すべきときであろう。

新政治勢力の結集で意思統一を

いま社会党は総括論議がすすんでいると述べたが一方で早くも離党が始まっている。また離党を近くするために相談している党员グループもある。党员にしてみれば、「自分と今までの党が主張してきたことを否定した逆の記事を掲載している『社会新報』を配布できるか」、さらには「今までの私達の考え方や政策は、今度の大会から変りました、といって歩けるか」など真面目に活動をやってきた党员ほど悩みは深く、中央執行部、国会議員に対する批判は厳しい。裏切られたという思いが重く一人一人の党员の胸におおいかかっている。当然これらの党员は離党を考える。又は離党して新たな政治活動のあり方を検討するだろう。さらにはグループとしての討議のなかで出処進退を考え、苦悩している。

これに対してわれわれは指をくわえて見ているわけにはゆかない。苦悩する党员は、当面する消費税率引き上げ反対の大衆運動はもちろん、今後の護憲のための諸運動を推進するためには欠けてならない活動的人達であり、これからの政治活動にとってその中心にならない。それが新たな政治勢力結集の「準備会」である。とりあえずこの準備会に離党したのも、まだ離党しないものも結集して、党内に残っている者は何をやるか、離党した者はどのようにして政治活動に再参加するか、準備会は明確な方針を出す責任がある。

また準備会は、これまでの社会党の基本政策をもとにそれを具体化する政策を大衆運動と結びつけて方針化しなければならぬ。その仕事もある。この仕事のためには、学者、文化人、税理士や弁護士、軍事、環境、原子力などの専門家を今まで以上に結集しなければならぬ。

さらには、社会党内にとどまりいわゆる「党内野党宣言」を行う総支部、県本。基本政策をこれからも堅持して、それぞれの運動方針に基本政策にもとづく方針・政策、行動規範を明らかにする総支部や県本。これらの県本や総支部は横に連帯してゆく必要がある。そのオルグ、調整などの役割も重要であって準備会の任務とすべきである。いわば問題提起はするが指令や統制を求めない書記局のようなものに準備会は位置づけられるのではないか。

すでに「護憲ネット」に結集しているところは、護憲ネットを通じて新たな政治勢力の結集に参加すべきであり（その強化・充実に力を入れる）、新たな結集は準備会に結びつくのではないか。

社会党内外での当面のたたかい

社会党左派・護憲派といわれる幹部党员のなかで、村山内閣と社会党への現状認識、今後の党運動、護憲の勢力の結集などについて意見が大きく割れている。今の社会党は誰れ

が見ても「護憲の党は崩壊した」と見るのに対して、左派の有力な県本専従者（役員）の一部と議員層には、「九五宣言」が来年焦点になるのでそこで「綱領論争」としてたまたか、三分の二による決定を阻止する、と主張している。しかし事態はそんな甘いものではなく、その前に村山政治はPKO、消費税、国連安保常任理事国、小選挙区割りなどいざいざ踏み込んでゆきつつあり、かつてとあまり変らない自民政治が前面に出てくるであろうから、護憲の党は名実共に解体することになる（社会党の独自性も失う）。

こと来年は、四月に統一自治体選挙があり、七月に参院選がある。これらたまたか党候補はどう政策を勤労国民の前に示すのか、次のたまたかいは「九五宣言」だといつていられるわけがない。仮に九五宣言（案）を阻止し廃案にしたとしても、今度の大会において「基本政策の転換」は終っており、九五年の自治体選と参院選後は社会党はその存在すら危うい状態である。綱領的文書「九五宣言」が決まらなければ基本政策の転換は終らないという理屈は成り立ってもそれは天皇の国事行為と同じことで、政治的には儀式に過ぎない。

われわれにとって極めて重要なことは、これから数年（一年―三年）の政治情勢をどう展望するかということである。財界は保守二大政党制をめざして、社会党の解体を前提とした政界再編を強力に推進している。これは総体としての保守勢力全体のものであり、これをマス・コミ、保守系学者、評論家などが強力にバックアップしていることはいまもあるまい。

二大保守政党制の目的は、憲法の明文改悪にある。この目的のために護憲の党を消滅させる最終的対策は小選挙区制による総選挙である。保守勢力はそれまでに村山内閣の手によって、国連常任理事国入り、PKF凍結解除、安全保障基本法の制定（改憲までの自衛隊合憲、海外派兵などを合法化したもの）などを実現させるようにしている。

内政上では消費税率を5%に引き上げること。規制緩和・市場開放ということで行革など体制的合理化（産業構造の転換という）を押し進め、賃下げ、二十万人の雇用切捨てをめぐす財界の要求に応える政治が実施されよう。農業の切捨ても順次行なわれる（食管法の改悪）。

ここ数年は勤労国民の抵抗がなければ嵐のような経済的政治的反動化が進展するであろう。

村山内閣は自民党に支えられ、九五年の参院選までは、内閣改造、選挙協力（形だけの）などによって続くことになろうが、自治体選と参院選の社会党大敗、野党の新々党の成立（社会、自民からも崩れる可能性あり）、国民の不支持拡大などによる村山内閣の退陣もありえる、と展望すべきである。

護憲勢力は改憲阻止を戦略として、政治的経済的社会的諸矛盾に対するたまたかを大衆闘争に盛り上げて運動をしなければならぬ。この場合、社会党では自らの党の村山委員長首班の内閣の政治に反対はできないであろう。しかし「党内野党宣言」や「基本政策の転換を認めない」という決定をした県本、総支部はかろうじて反対できるというものである。この場合は国民の共感をえられることになる。「新政治勢力結集準備会」（仮称）は、真正面から村山内閣との対決を含めて大衆運動を推し進めることができる。

（社会通信政権研究班）

中央はだめでも地方は元気だった

——基本政策転換と私たちの課題——

地方は基本路線支持

社会党はいくつもの歴史的な大会を経てきたが、今回ほど注目された大会もない。党是ともいふべき基本政策の大転換、今後の進路を巡る論議は党内外の注目を浴び、大会場は代議員、傍聴者、マスコミ関係者に加え、村山首相や閣僚を警護するSPも多く、通路まで塞がり移動もままならない状態だった。

朝九時前から兵庫、京都、奈良の近畿勢や地元東京の仲間と一緒に基本政策転換反対のビラを配り、代議員への要請行動を続けた。論議が始まったのは昼から、傍聴券を手に入れて聞き入った。

「連立政権と党固有の政策は違つて当然」と基本政策の堅持を求める代議員に「村山首相を是とするなら自衛隊違憲は主張できない」と居直る久保書記長。

これまでの玉虫色決着ではなく、異例の投票に。修正案は二二二票の反対で否決されたものの一五二票を獲得、①代議員権を持つ国会議員の大半が村山政権支持、②電通や全通、都市交などの組織票、③代議員を右派が独占しているような大阪、京都、兵庫に加え、従来は左派の北海道が揺れ動く状況、④村山政権への批判がタブーに近い党内事情を考えれば、地方は票数以上に基本政策堅持派が優勢ということではないだろうか。

党周辺の動き

さて大会前後の動きを挙げてみよう。①自社政権反対の議員も含め党内右派が新民主連合を結成、②兵庫では連合を媒介として新生、公明、民社、日新が選挙協力で合意、③近畿でも連合が音頭をとつて社会、民社、公明、日新が組んで政治団体を作り、この団体が来年の統一地方選、参院選、更には衆院選での候補者の公認、推薦をする動きがある。大阪や神戸など各党の力量が拮抗する中で闘われる小選挙区では、旧連立の枠組みの方がはるかに有利である。近畿の党候補者は自民よりは旧連立と組むものと思われる、④参院の護憲リベラルが新党結成に、⑤広島県本部は大会後も政策転換に反対で意志統一、⑥全国護憲ネットの動きとは別に党内外の議員や党員、活動家が護憲を鮮明にしたネットワークを結成、⑦反戦・反核・反基地団体、脱原発グループ、「日の丸」「君が代」反対だけでなくまらない市民運動団体の党への失望と離反、⑧財界が路線転換をこぞつて評価、⑨読売は「自民党は社会党に甘すぎる、今までの社会党の方針が間違っていたことをはっきりさせるべきだ」と主張、更に大転換は本物かと追い討ちをかけている。権力に一旦迎合すれば絶えずその証を求められることになる。

党内の希望的観測

村山首相は誠実な人柄、「人にやさしい政治」で支持率は上がり、長期政権も夢ではない。そうなれば政権担当能力も身に付き社会党らしさも発揮できる。また危険な一・一ラインの芽もつぶせる。もうスローガンだけでは政治はやれない、現実路線だ。何せ党の委員長が首相だ、やっと社会党は政権党になった。これを批判するのはとんでもない……と考える向きもある。しかし、これは党内の手前勝手な願望であって、市民はそう受けとめていない。

社会党らしさはない

戦後五十周年を前にして、社会党の委員長が首相なのになぜ国家補償を掲げた被爆者援護法を提出できないのか、従軍慰安婦への個人補償も彼方に追いやられた。消費税も増減一体処理で5%に引き上げられそうである。常任理事国入り（軍事的役割は義務から外し憲法の枠内で）の論議は為にするものであって、結局は状況追認の解釈改憲と同じことになる）も日程に上っている。ルワンダでの自衛隊のPKO活動を決定、PKF解除も微妙な情勢にある。

軍事費は世界で第二位、最新鋭の武器で装備している現在の自衛隊を合憲と認めたら、軍縮の理屈は出てきようがないではないか。次は合憲なんだから、有事立法だ、徴兵制だという論議も出てくるだろう。軍隊が堂々とのさばる社会になる。合憲の同じ土壌でこそ軍縮ができるというのは幻想でしかない。軍事力による平和など矛盾そのものではないか。PKOの成功例と報道されたカンボジアは今もって混乱の中にある。

原理と理念なき政党

時代にあわせていかようにでも変わるの原理ではないと小田実は言う。社会党は平和主義と民主主義の原理をかなぐり捨て、基本政策を一八〇度転換することによって党の存在意義は希薄なものとなった。加えて大会議案の文言からはイデオロギーに対する反感が随所に存在し、階級社会であることを直視していない。党中央の意識には社会主義どころか、今後めざすという社民リベラルの理念や気概も危ういのではないだろうか。

「日の丸」「君が代」にしても世間が認めているからという。「世間が認めている」ことを党の基本政策にするとすれば、政党の活動など不要ではないか。社会党から大衆運動が消え、現状追認が党の方針になるのなら社会変革は反党行為になりかねない。残るのは選挙だけの社会党、議員のための社会党である。

状況は最終段階

党の執行部がどのような政策を掲げようと、またその政策転換をいくら合理化しようとも、もはや支持者や有権者には何の説得力もなく聞く耳すら持ち合わせていないのではないかと思ってしまう。

ただでさえ民主主義の基盤が弱く、根強い政治家（屋）不信があるのに、権力を巡って

の永田町騒動では浅ましい各党の本質が露呈し、社会党の「理念より権力」も明らかになった。土井社会党の後、社会党の体制内化が進んだが、それでもまだ護憲の理念があった。それが今回消えてしまったのだ。

さて社会党は護憲に変わる党の存在意義とイメージを創り出せるだろうか。私には何もできない（しない？）ままに、荒波に党は消えていくように思える。すでに共産を除く野党は今月末には統一会派を結成、遅くとも十一月には新党を結成する。臨時国会では区割り法案が成立、候補者調整も大詰めに近づく。

社会党の地方組織で党と自民党、さきがけの選挙協力が順調に進むと見る向きは少なく、不利と見れば旧連立にいく候補者も出てくるだろう。どっちが有利かだけで判断する候補者、それを認める党中央。そこに理念や政策へのこだわりはない。もう末期症状である。政党助成で政党の腐敗は進む。永田町から地方の議員にもそれは及ぶだろう。

参院会派の護憲リベラルがいよいよ新党に動く。兵庫の護憲社会党、広島県本初め四〇％を占めた修正案支持の地方の動き、護憲ネットの動きを見ながら、足下を固めていきたい。少なくともあと一年で大勢が決定することは間違いない。残された時間は少ない。

（茨木市議・山下けいき）

自・社連立に異議あり

「ちょっと待ってよ」

みなさん方の奮闘に敬意を表しつつ、東京の片すみから、未熟を顧みず発言します。どうか、ご批判をお願いします。

政治の激変は驚くばかりです。その中でも、人々の移ろいの早さは目をみはるほどです。権力欲しさに「昨日の敵は今日の友」とばかり、社会党委員長を首班に担いだ自民党もそうです。社会党の変わり身は更にすばしこい。半年前には「非自民党政権のために」と、長年にわたって反対してきた小選挙区制やコメの輸入自由化に賛成しました。それが、今度は、同じ社会党執行部が自民党との連立政権に走り、あわよくば中選挙区制で総選挙をやるのだという。

私には、到底ついて行けません。私だけでなく、一般の国民にも理解できないと思うのですが、どうでしょうか。仲間たちは自社連立をさして「表と裏が一緒になった」「黨員はどうするの、それとも納得してるのか」「コロコロ変わる社会党」などと責めてきました。

「小沢の強権政治を阻止するための緊急避難だ」「中選挙区制で総選挙をするための選挙管理内閣だから」などと理由づけしようとも、それらは「党内の論理」、「永田町の論理」にすぎないのではないのでしょうか。「そんなに小沢が危険なら、彼らと連立を組む時、なぜ反対しなかったんだ」「中選挙区制で選挙をやりたいんなら、小選挙区制に賛成した村山執行部を、なぜ変えないんだ」と問い詰められた時、なんと答えるのでしょうか？

「国民に分かりやすい政治」を掲げながら、国民に最も分かりにくい政治を進めている

…これは、ファシズムの温床ともなる政治不信を、更に増幅することではないでしょうか。「東京新聞」(九四・七・一三)によれば、「支持政党なし」が前回五月調査の二二%から、村山政権成立後の七月には三一%に急増したそうです(日本世論調査会の調査)。これは危険な兆候です。

社会党は、細川政権への参加という「ボタンの掛け違い」から、破滅へと突進し始めたと思えてなりません。今や、党内の多くの幹部が、この激流に吞まれていくようです。昨年、総選挙で惨敗した時、わが党は大衆から不信任されたのですから「大衆の中に入り、党の再建を期す」と野党宣言をし、細川政権に対しては、せいぜいで閣外協力に止まるべきでした。私たちは、あの時「社会党はこれでいいのか」「無名」党員の会」という立場から「『自民党政権の基本政策を継承する非自民・非共産の連立政権』に反対します」という緊急アピールを出すなど、精一杯努力しました。今また、微力ながらも叫ばざるを得ないのです。

「ちよつと待つてよ、おかしいんじゃないの!」

あの時も、今も、流れに逆らうのは恐い。「孤立するんじゃないか」「だけど、職場や地域を見たら、言うしかない」「でも、自分は間違っていないのか」…、自問自答は続きます。

ただ不思議なのは、これほどの大転換に対して、左派の中からも批判や疑問の声がほとんど上がらないことです。これまでの経過を踏まえれば、自民との連立に対して内部の激論があつて当たり前であり、そのほうが組織内の民主主義として健全なのに。

「みんな、どうして意見を言わないの!」

「会社党」にしたなら

こうして原稿を書いている何日かの間にも、事態は急転回し、社会党の存在意義が失われつつあります。

わが党の村山委員長は、首相となるやいなや、「自衛隊は合憲」「日米安保は必要」「非武装中立政策は、その政策的役割を終えた」「日の丸・君が代を、国旗・国歌として尊重」などと、国会で答弁したのです。

社会党を支持してくれていた一千万人近い国民の声も、日常の活動に励み、長年、社会党を支えてきた多くの党員の意見も聞かずに。これが「民主的手法」を強調する政権のやり方なのでしょうか。

まして、自衛隊については「なし崩し改憲」と反対してきたのに、それを「合憲」とするなら、「護憲の政権」とは何を守る政権なのかと疑わざるを得ません。

村山政権の本質は何でしょうか。私は、自民党を中心とする保守政権であり、保守の中にあつては、比較的リベラルな「リベラル保守」の政権にすぎないと思います。そして、旧連立の小沢たちは、海部を含め、日本の資本主義的大改造を図る「改革保守」のグループなのだと思います。前者が漸進的なら、後者は急進的という程度の「手法」の違いなのではないでしょうか。いずれも、独占資本の代弁者であり、改憲をめざしている点では共通していると思うのですが、どうでしょうか。

職場の労働者は、鋭く本質を見抜いています。

ある国労の青年党員は次のように言っています。

「自民党には国鉄分割・民営で、さんざん虐げられた。一〇四七人は首切られたまま。そんな自民党と一緒にやる社会党に入っている理由はない」。また、私鉄を定年退職した先輩党員は「資本と労働の関係は常に対立し、時には鋭く対決していく闘いの連続であるという位置付けのもとに労働運動を進めてきた。資本を代表する自民党と労働者を代表する社会党は相入れない。許されざる敵と手を結んだことは多くの労働者に対する裏切りになる。理解できない」と訴えたそうです。

労働者の生の声として、日本の階級対立という真の姿を教えられるのです。国鉄の大量首切りの経験を振り返る時、どこに労資一体化の根柢があるのか！自社連立とは、労資一体化の最たるものではないのか！

私の職場の年配の労働者は、テレビのニュースを見ながら、ポツリと言いました。「Sさん、社会党は名前を逆にしたほうがいいよ」。私が「えっ、逆って？」と聞くと、「会社党だよ」。

今や、社会党は、味方とすべき労働者から、こう見られるに至ったのです。ショックでした。

下からの社会党再建運動

社会党は、残念ながら、保守二大グループ化の大浪に呑み込まれつつあります。共産党を除く総与党化現象は、大企業と一線を画し、働く者や社会的弱者の声と要求を組み上げる野党の消滅となり、「野党のない時代」を現出させつつあります。社会党の解体に手を買貸してきたマスコミすらが、「翼賛体制」を心配しなければならないほどです。これは勤労国民の大きな悲劇です。

この土台には、総評解体と連合の発足という職場での労資一体化がありますし、地方自治体などでの総与党化があります。既に、足元は崩れていたのです。

だが、私たちは落胆する必要はありません。総評、社会党という防波堤がなくなったということとは、職場や地域での矛盾を激化させますが、それは同時に、反抗の増大をひきおこさざるを得ないからです。

私の住む羽村市でも、首都圏中央連絡道という一大高速道路の建設に対して、それが大変な環境破壊をもたらすにもかかわらず、共産党を除く全会派（社会党を含む）が建設促進です。しかし、住民の中には、少数であっても粘り強い反対運動が続いています。私たちの今後の課題は、組織に安住せず、自らが、こうした下からの運動に入っていくことではないでしょうか。職場でも地域でも、矛盾のあるところ、必ず反抗があります。

私は、今後、「多数派結集」などの甘い言葉に惑うことなく、下からの運動に徹し、少数派の結集に全力を上げる決意です。市議選に出るのも、そのための一つです。

(一九九四年七月三十日)

「修正案」提出者に心から敬意

——北海道新聞にみる社会党大会——

九月三日土曜日、仕事が終わる通勤の駅で北海道新聞の夕刊を買って電車の中で読む。一面を読み二面を見ると、「社会党臨時大会『党員の声を聞け』本部前に一〇〇人詰め寄る」との三段見出しである。以下、この記事を抜すいする。

「村山社会党は党員の声を聞け」とシュプレヒコールが響く中、三日午前、社会党の臨時党大会が始まった。(以下、略)

一方、党本部前には百人を超す党員が詰め掛けた。入り口でもみくちやにされた来賓の山岸連合会長は「かなり手痛い歓迎を受けた。背広も破られた。責任党の名が泣く」と憤然とした表情。

兵庫県から来た団体職員(四五)は、「二十九年間党員だが、今日が最後のがけっぶち。憲法は守るぞ」と声を上げた。また東京都の主婦Tさん(五三)も「今日いかなでは社会党を見放します。しかし、今まで地域で頑張ってきた自分たちの活動は何だったのか」と寂しげだった。

家に着いてから、テレビ各社のニュース番組を注視した。そして詳しくは、翌朝早くに起きて四日付けの北海道新聞を丁寧に読んだ。以下、北海道に関係する部分(社会党北海道本部の幹部が取った行動・態度について)を抜すいするのは是非、参考にしていただきたい。

○第一面より方針案の採択について

本道代議員団からは、修正案の提出に佐々木秀典氏(二区)が名を連ねたが、投票では代議員の大半が修正案反対に回り、社会党道本部としては党の転換を支持した形となった。

○第二面より道内の社会党関係者の声

社会党道本部の神本三也副委員長は、「本道は横路知事が日の丸・君が代を国旗・国歌として認め、道本部もそれを是としてきた。村山首相を出した以上、党が国民に対して責任を果たすための転換は当然」と前向きに受け止めている。

○第三面より「社党大会の政策転換承認」、調整不発

「与党の重みが分かっていないんだ」社会党道本部の代議員たちは、左派が修正案を提出し、採決で決着という段取りが決まると、一様に表情を曇らせた。

横路道政を支えてきた社会党道本部には、政権党の先駆者という自負がある。久保書記長も党大会で、大平道本部書記長の質問に対し「地方とはいえ政権党である北海道の意見にはほとんどの点で同感だ」と答弁し、精いっぱい持ち上げた。

久保氏の発言は、道本部が全国の地方本部の取りまとめをしてほしいとのメッセージでもある。実際に久保・大平両氏は八月下旬から連日のように大会の乗り切り策を協議し、大平氏が全国の左派主要幹部との調整に当たってきた。だが、「政権と党の政策との使い分けは許されない」とする久保氏の主張に対し、左派や地方幹部は納得しなかった。大平氏の調整も結果的には不発に終わった。

「最後は数で決着すればいいんだ。」大平氏は採決直前、こう吐き捨て、現実政党内の脱皮が遅れる党の現実にはらだちをあらわにした。政権与党を知る者と知らない者との差だった。

○第二面「北海道新聞・社説」社会党は主体性の確立を急げ」

(前略) ここで、自衛隊合憲の記述の削除などを求める左派を中心とする反対派の修正案が採決で否決されたとは言え、小差だったことを銘記すべきだ。執行部は「宣言」に新基本政策を反映させるのは当然だとの解釈を示すとみられるが、反対派が「宣言」論議は別であるとして、新基本政策の是非論を蒸し返すのは間違いない。(中略)

また、私たちは「首相は歴史的大転換がご都合主義でないことを、きちんと説明しなければならぬ」と、指摘してきたが、活動方針を読む限り、転換への痛みがともなっておらず、首相提案が政権維持のための便法ではなかったのかとの疑問に明確に答えているとは思えない。

例えば、基本政策転換の理由については、五五年体制の崩壊によって自民党という「政敵」を失い、東西対立が消滅したから、中立・非同盟路線は「その歴史的役割を終えた」と言い切るなど、過去は水に流せと言わんばかりに、結論を急ぎ過ぎている。このままであらうか、国民の理解を得られるのだろうか。

昨年夏の総選挙で歴史的転換前の社会党候補に投票した有権者の再度の支持は期待できない。

政権与党になった以上、現実を直視した政策を取らざるを得ないのは分かるが、社会党に不満と物足りなさを感じながらも、護憲・平和の理念を追求する政党として、多数の国民が期待し、見守っていることも忘れてはならない。

以上、地方紙・北海道新聞の抜すい・引用に終始してしまっているが、しかし、商業新聞・の持つ役割(報道)と限界(新聞社・企業利益の追求)を十分に知りつつもあえて全国の皆さんに御一読を願う次第である。

最後に、社会党臨時大会で「修正案」を断固提出し基本政策の堅持を真剣に訴えて奮闘された代議員の皆さん、全国の党員(総支部・支部に結集する良識ある活動家)、支持者の皆さんに心より敬意を表するとともに、しっかり学んでいく決意である。

一九九四年九月四日 北海道・S)

◇ 投稿 ◇

必要な「護憲派」社会党員の体質改善

現在、全国ネットのみなさんの多くは、社会党が護憲政党として再生することを目標に活動されておられると聞いております。そうした方々からひんしゆくを買うかも知れませんが、私自身は社会党が護憲の政党として再生することははや不可能と見ております。社会党が自民・さきがけと連立を組むことによって成立した村山政権に対し、社会党内の護憲派議員や活動家たちの果たして何人がNO!と言ったでしょう。自民・さきがけと組んだことによって本来主張すべきことが主張できないような状態が、「連立だからやむを得ない」で片づけられる問題でしょうか。細川内閣の時も同様でした。つまり両者のどちらにも与すべきではなかったと言わなくてはなりません。「村山政権はハト派だ」などとのんきに構えていられる状況でないことは、最近の村山内閣の政治姿勢を見ればはっきりわかることと思います。こうした社会党の体質では、再生しようがするまいが、勝手にしろと言いたい。

今のところ、国会内では、社会党護憲派は少数派ですが、支配層主導の二大勢力に対抗するには、どうしても社会党以外の護憲派の協力が欠かせないことは目に見えています。

最近、市民運動、いや、社会党をどちらかと言えば支援してきた人たちの中から、自分たちの候補者を擁立しようとの声が全国あちらこちらから上がってきているようです。これは、私の感覚からすれば、少なくとも三、四年前にはなかった動向です。たしかに、全国の様々な市民運動の多くが身内のことだけに終始し、大きな運動の広がりを持ってないできたことは否めません。しかし、まだ少数かも知れないが、彼らが今、選挙に目を向け始めたことは大いに評価すべきことに違いありません。私自身は何らかの市民運動や組織に身を置いて活動しているわけではなく、せいぜい、選挙の時にいつも、「今の状況ではダメだ」と思って社会党に一票を投じた者の一人です。社会党に所属している護憲派のみなさんよりもはるかに多数を占める、こうしたごくありふれた政治意識、投票行動を持つ人たちが社会党内の「良識派」と協力し、ある程度選挙に勝てるように候補者を擁立したとき、本当に政治を変える力になるのではないかと思っております。

それでは、そうしたごくありふれた無党派のうちの何らかの市民運動に関わっている人たちと社会党の「良識派」の人たちとが、今後、協力し合う条件は整っているのでしょうか。少なくとも、「文句があるなら社会党に入れ」といった体質では、市民運動家ばかりか、これまでごく自然に社会党に投票してきた多くの党外の人たちと協力していくことはできないでしょう。

もっとも、社会党護憲派の人たちがいまだに「再生」にこだわっている間に、そうした無党派の人たちがまったなしで護憲新党を作ってしまうかも知れません。今日の悪しき政治動向に歯止めをかけるには、あまりにも時間がなさ過ぎますから。(秋田・一読者)

資料(1) 護憲の新たな政治勢力の結集をめざして

〔護憲ネット〕事務局第一次案

一、基本政策の転換をどう受けとめるか。われわれは限りなく右傾化する社会党のなかにあっても、社会党が平和と民主主義の憲法を守り、勤労国民の党としての本来の姿に再生・再生するように全力をあげてきた。この再生・再生の闘いは、労働運動をはじめとする大衆運動や市民・住民運動と深く関わるものであった。

しかし今度の社会党全国大会における「自衛隊合憲」「安保堅持」など基本政策の転換は護憲の党、勤労国民の党としての性格をかなり捨てて第三の保守党へ転落したものであって、現在のままの社会党の再建・再生はほとんど不可能になったと考えざるをえない。その理由は次の通りである。

- (1) 社会党の基本政策転換は、自民党と歴代政府が押し進めてきた解釈改憲に追随するものであり、憲法改悪への道である。改憲を狙う財界はすでに準備を開始しており、社会党はそれを阻止する指導性もエネルギーも失っている。
 - (2) 自民党や新生党などの保守党と理念と政策において違いがなく、社会党は日常活動、選挙闘争を闘う根拠を失う。ことに小選挙区制のもとにおける総選挙では、社会党は独自性を失い惨敗し、保守二党制をもたらすことになる。
 - (3) 村山内閣は保守政治にいよいよ埋没し、社会党首班は名目だけとなり、政治腐敗の再発、事実上の自衛隊の海外派兵、国連安保常任理事国入り、安保基本法の制定、消費税率の引き上げ、賃金ストップから賃下げへ、人べらし合理化による失業者の増大など反国民的政策の実行を強いられよう。そして勤労国民の社会党への不信は統一自治体選挙、参院選挙、総選挙で表面化し、村山内閣は崩壊し、保守政権にとって替えられよう。
 - (4) 護憲と勤労者の党としての社会党に人生の全てを賭けて活動し続けて来た党员と、資本主義の悪と闘い、勤労者大衆が社会の主人公になることに期待し社会党を支持してきた人達は、音を立てて党から離脱しつつあり、まさに解党の方向にある。われわれがこれにいか止めようとしてもこのままでは塞ぐことはできない。
- 二、われわれは何をなすべきか。社会党が保守党化して本来の党が解体しつつあるなかでも、われわれは社会党と共に五十年にわたる歴史のなかで掲げ続けてきた基本政策を捨てるわけにはゆかない。しかも憲法改悪が安保基本法の制定や自衛隊の日常海外派兵などを通じて日程にのぼることは必至であり、われわれの歴史的任務はいよいよ重要である。その自覚のうえに次の方針をもって護憲ネットの組織的發展をかちとり前進すべきである。

第一に、護憲の新たな政治勢力の結集をめざして、その準備会を発足させる。この準備会はわれわれと志を同じくする党内外の人達に広く呼びかける。

第二に、護憲ネットは今まで以上に大衆運動を重視し、大衆組織のなかに影響力を拡大する努力を傾ける。

第三に、社会党大会における修正案に賛同した代議員一五二人に代表される全国の護

憲・左派と強く結合して、広島県本部など党内にとどまり「政策転換を認めない」で、県本や総支部の独自性を発揮するところ、排除されたりやむなく離党してしまった人達、護憲派の文化人、自治体議員、国会議員等とは連帯を強め、共に闘えるようにする。

第四には、全国的に結合できるように、政策の具体化、諸運動の方針の提起、運動の学習と交流などを行い意思統一をはかる。

第五に、当面する自治体選挙を重視して、護憲派候補の擁立と勝利を期する。

以上の運動を通じて、中央の民主的な指導体制を確立しながら、各地の組織は独自性、主体性をもったものとする。組織的にも多様な形をとり、大衆組織のなかに多くのグループをつくる努力をする。

資料(2) 離党にあたっての声明(九四・九・五)

新たな護憲の新政治勢力結集に努力

私たちは日本における社会主義をめざし、日本社会党に入党してそれぞれ二〇有余年になります。この間、社会党とともに歩んできたことを誇りとしています。

一九八六年に『日本における社会主義への道』に変わり、『新宣言』が綱領的文書になりました。これによって、社会党は綱領次元では社会主義をめざす政党ではなくなり、社会民主主義の政党となりました。しかし、社会党は「非武装中立」をはじめとした護憲の政党でした。

九月三日に開催された第六一回日本社会党臨時全国大会で基本政策が変更されました。国会議員に一般党员との平等を欠く代議員資格を与えたり、選出方法に民主的でない点もありますが、大会において最も民主的な「無記名・一票投票」で、可決された事実を重く考えます。

このことにより、社会党は解釈改憲の立場を取ることとなり、護憲政党ではなくなりました。社会党は、小選挙区比例代表制選挙を受け入れた時から、基本政策の変更による政界再編・社会党消滅への道を選んだといえます。

立党の精神である「非武装中立」、「反安保・反自衛隊」、「反日の丸・反君が代」、「反原発」等を転換し、護憲を放棄した社会党に党员としてこれ以上留まることは、私たちの政治方針に反します。私たちは臨時大会をもって、社会党を離党しました。

再来年の日本国憲法公布五〇周年をひかえて明文改憲の動きが大きくなることが予想され、日本国憲法は公布以来最大の危機を迎えています。

生物は誕生し、成長、死滅していくように、組織も発生、成長、衰退していきます。護憲政党たることを放棄したことによって、党の存在意義、国民の支持がどう変化するかは党自体の責任です。社会党も成長、発展し、国民と党员に受け入れられなくなれば、衰退し、新しい組織に生まれ変わります。

社会党が護憲政党たることを放棄した以上、明文改憲攻撃に党として反対運動を組織しえないのは明確です。今後は、来るべき明文改憲攻撃を阻止するために、社会党に代わり立党の精神を受け継ぐ新たな護憲の政治勢力の結集を努力していきます。

日本の階級闘争、護憲運動とベトナム、中国

——中国、ベトナムを旅して (一)——

注目されるベトナム・東南アジア

八六年以降、社会主義諸国を精力的に歩きまわってきた、ゴルバチョフ逮捕の報を、プ
ラハで聞く等、劇的な場面にもしばしば遭遇した。

ロシア、東欧社会主義は崩壊し、キューバも危機に直面している今日、アジア社会主義
は幾多の困難に直面しながら、これを克服し政策の転換を計りつつ、政権を維持してい
かのようなのである。

特に、中国の広東州を中心とする沿海経済解放区、ベトナムは「社会主義市場経済」の
名のもとに、大胆に「市場経済」を取り入れ貧困の克服、経済の発展につとめている。

今回、ベトナム、香港、中国深圳訪問を企画したのは、「社会主義市場経済」の実態を、
この眼で見、この耳できくためであったが、もうひとつの問題についても示唆を得るため
である。

もうひとつの問題とは、資本主義世界経済との連関である。世界資本主義は、九〇年以
来同時不況におち入り、これをはい出す道を見出し得ない。

わずかにアメリカが活路を見出しつつあるかのように報ぜられ、日本も「底入れ」した
といわれているが、失業者は益々増大しつつある。アメリカは、カナダ、メキシコと、N
AFTAを形成し、アメリカ資本は、低賃金労働力を求めて、メキシコに逃避し、産業の
空洞化、失業者の増大はさけられそうにもない。ヨーロッパの失業者は千五十万を越
え、一〇％台を維持している。日本はどうなるのだろうか。この問題は、東南アジア、特
にベトナム、中国を抜きにしては考えることはできない。東南アジアの、NIEs、AS
EAN諸国は、この一〇年、一〇％台の経済成長率を維持し世界不況の中で特異な存在と
なっている。かつて、マルクスにより、「アジア的生産様式」と規定され、専制君主が、
群小の共同体を全一的に支配していたアジアの停滞は、うちこわされ、驚異的發展の場
に変容している。

しかも、この発展は一樣ではない。NIEsがまず先頭を走り、ASEANがこれに追
いつき、いま、中国解放区、ベトナムが、巨大な市場として、世界史に登場しようとして
いる。中国、韓国、ベトナム、香港、台湾を結ぶ西太平洋経済圏が形成されようとして
いる。この経済は、不況にのたうちまわる資本主義世界に、どのようなインパクトを与える
のか、労働者、国民のたたかいに、どのような連関をもつのか。

いずれにしても、日本の労働運動、階級闘争と、密接な関連をもつことは疑いない。こ
の小論で、このことを論ずるのではない。

このような問題意識をもって、今次旅行を計画し、東京の現場教職員一七名で団を編成
し、八月四日～一二日、四〇度に達せんとする炎暑の中、各国を訪問した。

当初の問題については、日本の階級闘争前進のため研究、調査を継続してゆく。

みなぎる活気、オートバイの群れ

香港から、二時間半で、サイゴン（ホーチミン市）につく。炎熱三九度の東京から飛びたち、さらに暑いサイゴンを覚悟していたが、降りたつたサイゴン空港は、成田よりしのぎ易い。通訳のマオ君は、三一度という。スクールが一日に一回必ずやってきて、その後は二七度にさがるという。この街に三日いたがたしかに湿度も高く、お世辞にも涼しいとはいえないが、今年の東京よりは、しのぎ易い。

驚くべきは、街に溢れかえすエネルギーである。街はオートバイの凄じい流れ一色である。車も、自転車も殆どない。老若男女、胸を張り、オートバイに乗り洪水のように、街を走っていく。

十数年前中国北京におりたち、天安門広場前の大道路を走る自転車の群に圧倒された記憶はあるが、あんなものではない。よりダイナミックな集団が音をたてて、大道路を走ってゆく、一日中のべつまくなしにである。

「通勤時間でもないのになぜこんなに多くの人が街を走っているのか」ときくと、「三交替勤務のせいかと思うが、ほんとうのところは私もわからない」とマオ君はいう。青ザイをきた、色白のベトナム美人が、さっそうと、バイクを走らせる景観はなかなかみごたえがある。

「あのバイクはいくらするのか」

「約二〇万円、日本の中古がほとんどだ」

「月収約五千元でどうして買うんだ」

「親兄弟、親類縁者から借金しても手に入れる」と、答えるが、どうして返すんだらう。官吏と先生の賃金は安いというが、アルバイト料が本収入の数倍はとる。特に先生は商売がうまいという。公務員もしかりだ。この国のブラックマーケットは、想像以上に拡大し、経済を支配しているようだ。

一七年、ソ連、東欧に先んじて、はじまった新経済政策「ドイモイ」は多くの困難を克服して、現ドームオイ共産党体制、ヴァン・キエツト政権体制に、きっちり位置づけられすすめられている。

この国の社会主義は輸入品ではない。ホーチミンを中心にして、フランス、アメリカと自力でたたかいかちとったものである。ドイモイにしても、ソ連、東欧に先がけてすすめている。このことがソ連、東欧の崩壊の波をはねかえし、自力で経済の再建を計り、共産党政権を維持させている最大の理由である。

「市場経済」はもはや後もどりでできない。街にはおびただしい果物、肉、ベトナム料理、春まき、肉の屋台が溢れている。市場は、ニョクコム（魚しょうゆ）の臭いでむせかえり、肉、魚、野菜、果物はいうに及ばず、衣料、雑貨が溢れ、驚くべき安い値段で売られている。月収平均は五千元というが、物価も日本の一〇分の一から二〇分の一、食料はさらに安い。とにかく、なんとかやってゆける。

ソ連では、このような活気を見ることがなかった。十数年前からデパート、国営市場か

ら物資は姿を消し、長蛇の列があった。この活気、この消費物資、激増する人口（七五年から二千万増え、現在産児制限強化）ベトナムは崩壊することはないとの印象を強くした。

社会主義政権と市場経済

「共産党をどう思うか」

マオ君の答は微妙である。国営ツリストの職員でありながら、はつきり、社会主義を批判し、汚職官史を告発する中国、緊張し青くなり顔をこわばらせて、朝鮮労働党を擁護する北朝鮮通訳。丁度この中間に、ベトナムはあるといえよう。

「ホーチミンは、偉大だ。しかし、現在の共産党、政府官僚には、良い人も悪い人もいる。偉くなると汚職する」と彼は、緊張した顔で答える。

ホーチミンは町人からも敬愛されている。フエ歴史博物館正面のホーチミン像に、參觀者は押しなべて、深く頭を垂れていた。位は、マルクス主義というより、目線の高さで民衆に話しかける「ホー、おぢさん」、民族の英雄として親しまれている。

この人により組織されたベトナム共産党は、フランス、アメリカ、中国に勝ち抜いている。しかし、七五年独立達成後、経済政策の失敗と共に、彼等の間に、汚職、腐敗が生まれてきたのも事実である。

無能なる人間の縁故採用、過剰人員、行政機構のマヒ、無能なる共産党幹部による企業経営の破綻。改革派、保守派の闘争は、改革派が勢力を拡大し、大幅な人員の入れかえが行なわれつつある。しかし、戦争の傷あとと深く、有能なテクノクラート、企業人は枯渇している。

外国の投資拡大を切望しているが、市場経済を運営する人材の養成は、急務であろう。それにもまして問題となるのは、法律制度の確立である。市場経済の発展は「私的所有権」の確立を前提とする。ベトナムは、早晩、この点を中心とした、民法、商法体形を整備せざるを得ない。このとき「社会主義的所有」をどうするのか。重大な問題に直面せざるを得ないだろう。

不屈の民族、ベトナム人

サイゴン市から約七五キロ、車で二時間のクチは、ベトナム戦争最大の激戦地である。

ここには、地下二百キロに及ぶ三層の地下壕があり、ベトコン約一万はここを根拠地にしてアメリカとたたかった。六三年から七三年の間、アメリカ軍は空前の爆撃を行い、枯葉剤、毒ガスを散布し、クチ一帯の緑は消滅し砂漠と化した。ベトコンは地下に作戦司令部、手術室、あらゆる設備をつくり、一〇年余不屈のたたかいをつづけ、サイゴンを解放した。四毛作の水田が広がる農村を通り到着したクチはみどりにつつまれ、地下壕の入口が、ところどころにかくされていた。

ベトナムの歴史はたたかいの歴史であった。近代までは、北方、漢民族の侵略に抗し、千余年抵抗のたたかいをつづけ、これをしりぞけた。近代に入ってからは、フランス帝国主義の植民地化とたたかい五四年、これをディエンビエンフーに潰滅させ、北ベトナムは独立した。

それから、七三年まで、アメリカとたたかいこれをしりぞけた。その後も中国、鄧小平の国境侵略を追いはらい、カンボジア、ボル・ポト政権を制圧している。

実に強い。不屈の民族の歴史をもっている。彼等は勤勉であり、良く働く。路ばたで、物を売る老婆、若者も、足を投げだし、本や新聞を読んでいる。識字率は九六%、東南アジア第一である。人間は謙虚で体形はスリム、美男、美女が多い。旧い都市フエの街を歩く女子高校生は、青ザイを風にたなびかせ、実に清楚であり美しい。勤勉にして、清楚、識字率が高く、規律がある。東南アジア随一の労働力と云っていい。

「ベトナム民族は強い、不屈の民族だ」との賞賛に対して、マオ君は、

「戦争に勝って、貧乏になった。日本は負けて豊かになった」と答えた。

団員の一人が、それは冗談か本気かとたずねたのに対し、

「冗談でもあり、本気でもある。たたかいすぎたのだ。戦争の傷あとはあまりにも大きい」と。たしかに、ドイモイは、進行し、物資は街に溢れている。しかし、貧富の差は拡大し、乞食も多い。サイゴン、ハノイ、フエ、ダナンどの街にも、子ども、物売り、乞食がむらがっている。中国にも子ども、物売りは多い。しかし、このように、ただ金をねだる乞食は少なかった。民族のほこりと、自覚はどうなるのだろうかという危惧は強い。

戦争の傷あとは深い。サイゴン「戦争犯罪展示展」は枯葉剤で奇形となった子どものアルコール漬けが展示され、目をそむけるものがあつた。国民の三〇%はいまだに戦争の傷を負い、精神疾患も同じくらいあるという。ベトナムはこの犠牲を払って、独立した。もし負けていたら、パナマ、プエルトリコ等、中南米諸島の国々のように、より悲惨なアメリカ植民地となっていたことであろう。戦争の傷あとは大きい、しかしベトナム国民は、これを克服し、ゆたかな未来をつくり上げることは疑いない。(坂牛 哲郎、つづく)

◇ 読者からのおたより ◇

職場は資本・当局の思うまま 激変、激動の情勢に戸惑いすら感じる毎日ですが、労働者の扱われざまは、当局・資本の思うがままの実態です。しっかりと地を足につけ、全通運動の再生に向けがんばらねば。(全通・み)

編集部より どの職場からもウメキと悲鳴が聞こえてきます。とりわけ郵政職場から。たたかう力が蓄積されているからでしょう。仲間の声を集めてください。話し合いの場をつくることが大事。

五八一号の「通信に一言」に一言 ズロース表現大いに結構。小生かねてから、総支部や県本部等で、パンツを脱ぐ、いわゆる「ノーパン」を連発愛用している。九月二日の全国党員総決起大会に併せ、九月三日、党臨時全国大会(自称ノーパン大会)には動員者として声を枯らした。それにしても、左派特有のお上品とお人好しでは、勤労大衆を揺り動かす、右派や敵を圧倒することはできない。(島根・I)

編集部より 九月三日の党大会、私も声を枯らしました。同感です。向坂先生の雷がな

つかしい限りです。

自分自身が問われる時 自分を変えるのか、党を変えるのかが問われる九月です。党を変えたい、変わらねば今まで生きてきた道をまっすぐ歩ける党（政治勢力）をつくらねばならぬ。
(奈良・I)

編集部より 先日はお疲れさま。お会いできるとは思っておりませんでした。まっすぐ歩ける党”をめざしましょう。

社会党に入党 今年に入り社会党に入党しました。まだまだ駆け出して勉強中ですが、書記次長という役職も与えられ、先輩の皆さんとともにがんばっています。近日中に臨時党大会に向けた支部全党員集会を開催しますが、独占資本の喜ぶような基本政策の変更を許さず、あわせて日常的な党活動の追求（具体的実践）をセットで討論を深めたい。まだ職場でも「対当局」というものの見方、考え方を青年部らしく回りの仲間にはげたい。再会を楽しみにしています。
(北海道・S)

編集部より 困難ななかの入党、敬意を表します。社会党らしさをどうとりもどすか、力を合わせましょうよ。

「御奮闘を」 「通信」の誌代です。ご奮闘を！
(大阪・S)

編集部より 励ましありがとうございます。力をお貸しください。
断水中 松山も七月二六日頃から断水中（現在一三時～二二時給水のみ）。七月のある日、山へ草や笹の下伐りに行ったはよいが、ハチに刺され痛いなんの、飛んで帰った。それ以降は山へ足ふみ入れず伸び放題でしょう。中央政界はドンデン返して四国の田舎からは何のことやら、また社会党の行末も見えず…。もっぱら能狂言鑑賞、あと一杯、雑学の読書、散歩。貴誌の発展、活躍を願う。
(松山・S)

編集部より 八月、山形の仲間とともに沢に入りました。岩魚をめざしたのですが、アブの標的にされてしまいました。これも雨不足のこととか。楽しみながら活動するのみ。
社会党は解党を 何とかかんとか言いながらも社会党は健在であって欲しいと、期待を持って支持してくれていた人びとがいっぱいました。その人達にきちんと説明をして解党してもらいたい。
(武井廣司)

編集部より 同感です。下駄の雪のように融けて流れたんではたまりませんから。
党本部に意見書 社会党支部で中央に意見書を上げました。もちろん基本政策を守れという内容です。がんばってください。

編集部より がんばります。多くの意見書に目を通しました。みんな反対なのに、どうして。私たちはもつと貪欲でなければと思います。ご活躍を！

九条の創造的発展の秋 戦後史の大転換のなかで、侵略戦争の反省が結晶している平和憲法の核心＝九条を創造的に発展させるべき秋が来ている。貴誌の一層のご発展、ご健闘を今こそ期待します。
(宮城・T)

編集部より 社会党が「護憲の党」を放り投げた今、どうすれば。ご意見を！

拡大します 拡大について、具体的にすすめていく決意で取り組みます。
(大阪・M)

編集部より 「通信」、十一月で満一七年になります。これまでのご支援、感謝。これからもよろしく！